あの日

15期　舟田 節子

「あの日」という意味深な単語を、私のワンゲル史上で使うとすれば、平成４年１１月３０日となります。

それは、来夏の移転を控えた城内キャンパスの部室へ、「創部３５周年記念誌編集委員募集」の紙を掲示に行った日なのです。　四半世紀後の今日まで存続するとは予想できなかったＯＢ会、「ＯＢ側に事務局をおいたＯＢ会」を構築するための、仲間集めを始めた日です。

もう十分昔話になってしまいました。

２５周年までは、従来通り、現役側の「ＯＢ係」が事務局相当でした。運悪く（？）５年毎の創部記念事業年にあたってしまった代が、遡って名簿を整え、ＯＢを記念白山登山にお誘いし、替りに多少の寄付をお願いする…という形で続いていたのです。

２５周年行事後に、２６期の浅井君が、「ＯＢ側にも」事務局をおいた、現役と共同の運営を提言しましたが、「ＯＢは仕事で忙しい。想定が甘い」と一蹴され、彼の卒業と同時に、その活動は終焉しました。

ただ、そんな協議懇親会の場に、ナカオの医王山からの帰りで、ワカンを抱えたまま寄った私は、彼の目に留まっていました。「是非、ＯＢ側の事務局を」の依頼を、１０年後の資料整理段階で見つけました。遥かなる伏線といった所です。種は、深遠に蒔かれていたのかも…。

その翌年に、末っ子を授かることになった私には、まさに「ＯＢは仕事も育児も忙しい。到底考えられない」であって、浮かびもしない話でした。

そして１０年近い月日が流れた平成４年、私は夫までを山にまきこみ、家族登山もやれば、一緒に笈が岳や、毛勝山にも同行登山を楽しめるようになっていました。

そんな毛勝行きの２か月後に、現役蒲原君の剣岳滑落死亡事故はおこったのです。

「金大ワンゲル」の名が新聞紙面に載るも、ＯＢ連に連絡の術がありません。救助活動などもっての他ながら、ＯＢ会としての動きがとれないもどかしさと悔しさ。

おりしも、一年後に、角間へのキャンパス完全移転が迫っていました。

ＯＢ会を再興するなら今しかない。
誰が？それは多分、山現役で、城内キャンパスに近い住所の私の他にはいない。

どうやって？

山中で、ナカオのボスに相談すると、「まず、仲間を集めることだ」

この時点で、２～３の人には相談してみましたが「馬鹿げたこと」と、一蹴されました。そう、馬鹿げたことでした。

しかし、私は、ワンゲルの実績でもって、当時未婚女性しか入会できなかったナカオに入会できていました。さらには夢だったファミリー登山も実現でき、山渓の分県登山執筆のメンバーにも加われていました。それらの原点に、ワンゲルがありました。

そうであっても…半端な覚悟では始められません。

その時、丁度ナカオの３０周年記念誌が発行されました。それを手にしても上の空です。私は部誌「ベルクハイム」が２８～３２号という５年分

一括で編集されて、以後また立ち消えていることも知っていました。

もし、このまま部室が角間へ移転となったら、どさくさに紛れて部の歴史は永久に消えてしまう。これだけの歴史をつないできたのに…。本当に、眠れないくらいになってしまいました。

この機を逃すわけにはいかない。やらなかったら、一生後悔してしまう。泥につかる覚悟でやろう、本気で仲間を集めよう！

では、どうすれば？ここまでばらばらできた我関せず同士のＯＢです。「みんなが歴史の一員としてつながっている」「みんなが、共通の認識からスタートする」ための、歴史を俯瞰できる記念誌が必要だ。まずは「３５周年記念誌を作ろう！」を呼びかけよう！！

そんな経緯で、貼紙に行き、現役委員２名をゲット。さらに、現役とＯＢの協働を合意しました。やはり、彼らのＯＢ名簿集めは頓挫していました。同時に、死亡した仲間を思い、何かに動かねば…の心境でいたのです。

それから、各期代表（主に主将）に発起人を依頼し、記念事業決起のための現役と地元ＯＢの懇親新年会を開催。実行委員を選出。現役が担当の白山登山記念行事、３５周年記念誌の発行などを確認し、募金集めを含む趣意書を発送しました。

多くのＯＢが「待っていました」とばかり、賛同してくれ、３００万円を超える醵金を集め、平成５年８月、正式に、新体制（ＯＢ側に事務局をおく）ＯＢ会は発足しました。

丁度ＯＢがリタイアを始めた頃でもあり、インターネットが普及し始めた頃でもありました。

無事、多くの方の厚意に支えられ、支部活動も始まり、小屋酒場や、登山道整備作業、さらには野沢温泉スキー合宿も始まり、継続されています。

私はＯＢ会が存続している実績を作るために、その後１０年間、事務局と会報編集長を兼務することになりました。その間、相当に愚痴ったこともあります。

でも、本物なら、個人の手を離れても続いていく。他の誰かにバトンタッチできてこそ、本物になる。…そういうことでした。

今は、「崇高な（？）喜び」といったようなものを感じます。「私が、私が」なんて言わなくても、続いていく組織。空気や水と同じように、あって当たり前のようになったら、ほんまもんの仕事がやれたことになります。

私ではない誰かが、いずれやったかもしれない…。いえいえ、私こそが、時に選ばれて、「今こそ、狼煙をあげよ！」の託宣を受けたのです…。歴史を飾った聖女のように…ゴホゴホ。

ＯＢ通信とか、ＯＢ支部活動とか、いろいろ耳に入るたび、ニヤニヤしている、観音様のような（？）私がいます。そうです。めったに、こんな体験はできません。

こういうことを一つでも、世の中に残して去れたなら幸せです。代を変えて、引き継がれていくことこそが、永遠の命です。

「あの日」に行動してよかった！！

多分、スキー合宿参加の高齢ＯＢが対象なら、さして聞き苦しくもない話であろうと、ここに記します。

―完―